2P1-B3 会話評価のための会話素材提供ソフトの開発と利用

Development of a software providing conversation topics : Assessment and intervention of conversational interaction between communication impaired elderly individuals and careworkers

○坊岡峰子, 坊岡正之*

県立広島大学 保健福祉学部 コミュニケーション障害学科

*広島国際大学 医療福祉学部 医療福祉学科

Mineko Booka, Dept. of Communication Sciences and Disorders, Prefectural University of Hiroshima.

Masayuki Booka, Dept. of Health and Social Services, Hiroshima International University.

1. はじめに

脳血管障害の後遺症としておこる失語症や認知症に伴うコミュニケーション障害に対する支援は、本人への訓練に止まらず、日常の会話相手による障害理解や、適切なコミュニケーションスキルの習得といった人的環境への支援へと広がりは始めている¹⁾。

そこで著者らはコミュニケーション障害者と介護者の会話場面の評価を行い、その結果を取り入れて適切なコミュニケーション技法などについて介護者に個別に具体的な助言を行うことを目的に、現在、コミュニケーション支援プログラムを開発中である。

本発表では、コミュニケーション障害者と介護者の会話場面の評価を目的に開発した会話素材の提供のためのパソコンプログラム「会話の散歩道（仮称）」を紹介し、本プログラムを使用した会話評価及び支援の効果を事例を通して報告する。

2. 方法

2. 1 会話評価のための素材提供プログラム「会話の散歩道（仮称）」について

本パソコンプログラムは、パソコンの画面上にアルバム風の画像を提示し、会話を引き出すための素材を提供することを目的に開発した。

プログラムの構成は、1コースがパソコンに慣れるためのリラックス画面と静止画4カテゴリー（食物、動物、子ども、風景）と動画からなり、全部で4コースある。

評価時には4コースのうちのいずれか1コースを使用し、再評価時には別のコースを使用する。

2. 2 手順

- 1) 高齢者施設の介護者とコミュニケーションに何らかの障害もつ施設利用者（以下、利用者）が「会話の散歩道（仮称）」を使用し、会話する場面をビデオ撮影した（支援前）。
- 2) 本支援プログラム用に作成した、20項目（5件法）からなるコミュニケーション評価表を用いて、録画した会話場面をみながら言語聴覚士（以下STと略）5人と介護者自身が評価し、その評価結果より介護者に個別に助言をおこなった。
- 3) 介護者には助言した内容に留意して日常の会話をしてもらい、約1週間後に再度「会話の散歩道（仮称）」を使用し、同じ利用者との会話場面をビデオ撮影した（支援後）。
- 4) 支援前と同様に、録画したビデオを見ながら会話評価を実施し、支援前と比較して支援効果を検討した。

3. 結果および考察

本プログラムによるコミュニケーション支援の効果を支援前後で、ST5人の評価の変化、介護者自身の評価の変化、STと介護者の評価の変化の比較により支援効果の検討をおこなった。その結果、評価者間で評価基準にばらつきがみられたものの、①ST、介護者ともに支援後には評価が高くなった項目が多くみられ、②支援前後の評価の変化やSTと介護者との評価の差などから、助言の手がかりが得られた。また、③介護者自身が評価することによる「気づき」の効果があった。

以上の結果より、介護者はSimmons-Mackie²⁾らが指摘する会話相手に必要とされるコミュニケーション技法を習得したことが確認され、本プログラムによる支援の効果がみられた。

これらのことより、今後は本支援プログラムの基本的な構成は維持し、コミュニケーション評価表の改訂、支援方法の詳細や日常生活場面の波及効果の評価方法をさらに検討していく予定である。

また今後は、評価のためだけではなく、コミュニケーション障害者の日常生活に即した話題が提供できるよう、簡易に素材作成ができるパソコンプログラムの開発も有用と思われる。

（謝辞）本研究実施にあたり、ご協力をいただきました高齢者施設の介護士、利用者、言語聴覚士の皆様に感謝致します。尚、本研究は平成16年度（財）三菱財団の助成を受け「高齢者施設利用者の認知・コミュニケーション障害の評価及び介護者支援」（研究代表者：綿森淑子）の一環として実施した。

本パソコンソフトは、（有）ベイゲット、綿森淑子（県立広島大学大学院）、大澤富美子（横浜市総合リハビリテーションセンター）、沖田啓子（西広島リハビリテーションセンター）、成田美保（元・名古屋市立大学）との協同研究により開発したものである。

（参考文献）

- 1) Kagan A, Black SE, Duchan JF et al: Training volunteers as conversation partners using "Supported conversation for adults with aphasia(SCA)": A controlled trial. J. Speech Hear. Research 44: 624-638, 2001
- 2) Simmons-Mackie N, Kagan, A.: Communication strategies used by 'good' versus 'poor' speaking partners of individuals with aphasia. Aphasiology, 13: 807-820, 1999